

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	「夏期英語集中講座」：1997年から2019年までの取り組みとその成果
別タイトル	カキ エイゴ シュウチュウ コウザ 1997ネン カラ 2019ネン マデノ トリ クミ トソノ セイカ
作成者（著者）	朝, 加奈
公開者	東邦大学
発行日	2021.02.19
ISSN	03877566
掲載情報	東邦大学教養紀要. 52. p.79 92.
資料種別	紀要論文
内容記述	論文
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/toho.liberal.arts.rev.52.79
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD78034986

「夏期英語集中講座」

— 1997年から2019年までの取り組みとその成果 —

吉 朝 加 奈¹

“Overseas Summer Intensive English”

— The Program’s Contents and Effects from 1997 to 2019 —

Kana YOSHIIASA¹

1. はじめに

経済協力開発機構（OECD）の統計によると、日本人の海外留学者数は、減少しており、日本の学生の海外留学離れが指摘されている（OECD, 2019）。一方で、大学のプログラム等を利用して短期留学をする学生数は増えている。日本学生支援機構の「日本人学生留学状況調査結果」によれば、2018年度に、日本国内の大学から海外に1ヶ月未満の留学をした学生が76,545名（日本人学生で留学した全体の66%）である。これらの1ヶ月未満の学生の多くは、ランゲージセンター等の大学附属機関や民間の語学学校での短期の語学研修を受けるために渡航している。全体では短期留学のニーズが高い状況だが、専攻分野別で比較した時に医療・保健専攻の学生の留学は少なく、全体の5.2%（5,960名）である。

東邦大学看護学部では、科目としての短期海外研修として海外研修（主に欧州）や国際看護の統合実習（タイ）など複数あり、語学に特化したものが「夏期英語集中講座」である。この「夏期英語集中講座」は医療短期大学であった1997年に開始し、もし新型ウィルスのパンデミックによる渡航禁止がなければ、この2020年度に20回目を迎える予定だった。

「夏期英語集中講座」は、短期間ではあるものの、英語という学習言語の環境に身を置いて集中的に教育を受け、さらに看護という専攻にあわせた特別の研修内容を盛り込み、ESP（English for Specific Purposes）の特徴をもつプログラムである。国際的な視野と世界で通用する英語力を兼ね備えた看護師を育てる、という本学看護学部の教育方針をこの短期語学留学でどのように実現しようとしたのか。本稿では、1997年からの取り組みを振り返りつつ、その教育効果を検討し、看護学部における短期語学留学プログラムの意義を考察する。

2. 「夏期英語集中講座」の変遷

東邦大学看護学部における短期語学留学プログラム「夏期英語集中講座」については、1997年の開始以来、プログラムの内容や学生たちの参加報告等を含んだ報告書が発行されており、これらは、現在のプログラムを考察する上で、重要な資料となる。まず、「夏期英語集中講座」

¹ 東邦大学看護学部外国語研究室

の変遷を振り返りたい。

2. 1. Concordia University での開催 (1997 年～2007 年)

本学部の「夏期英語集中講座」は、医療短期大学時代の1997年に開始した。カナダのケベック州モンリオールのConcordia University 附属 Continuing Education Language Institute を留学先とした。1997年開始当時は、7月23日より8月31日まで40日間と、現在より期間の長いプログラムである。授業開始の前週の水曜日に成田を出発し、トロント経由でナイアガラの滝を見学した後に、金に現地に到着し、市内観光やオリエンテーションを経て、月曜日から5週間の集中英語講座を受講している。授業開始前に、時差になれる配慮をしたと推察する。当時研修責任者として引率した大野浩は、Concordia University を選んだ理由として、大規模な「国際大学」であり、また「TESL (Teaching English as a Second Language) をカナダで最初に始めた大学としての伝統」があり教育内容とその技術に定評があることをあげている(東邦大学医療短期大学, 1999年)。また、英語とフランスの2つの言語が公用語であり、フランス系カナダ人、イギリス系カナダ人に加え、50カ国の出身者を有する「国際都市」モンリオールは、「異文化に満ちた環境は、英語を学習するだけではなく、国際感覚を身につける上でも非常に理想的である」と評価している(東邦大学医療短期大学, 1999年)。第1回の参加者は、2年生と3年生から希望した学生15名、本学教員1名、本学職員2名、大森病院の看護師2名、大橋病院の看護師2名の合計22名だった。大学近くのホテル・アパートメントで共同生活を営み、週5日間9時～15時までレベル別のクラスに分かれて、ヨーロッパやラテンアメリカ、中東、アジアと世界各地から集まった学生たちと共に英語を学んだ。週末に、名所旧跡の見学のみならず、現地の病院や高齢者福祉サービスセンター、エイズのホスピスなどの医療施設の見学も行っている。英語を学びながら、現地の医療事情について学ぶというプログラム内容は現在にも引き継がれている。

参加した看護師たちや学生たちの報告によると、参加者の多くは、レベル分けテストの結果、初級クラスに配属され、クラスメイトが話す内容を理解できなかったり、宿題がこなせなかったりと非常に苦労したようだ。しかし、段々と英語の環境に慣れ、5週目に入る頃には「日常会話ができるようになった」「英語を使うことに自信がついた」などの語学面における成長が報告されている。また、医療施設の見学により、カナダの医療から多くの気づきを得、それを日本で看護の学びや実践に活かしたいという学習への積極性も養われた様子が記述されていた。

1997年の第1回の講座が好評だったことから、翌年1998年に第2回が実施された。学生6名、大橋病院看護師1名、教員1名の計8名が、7月22日～8月24日までの34日間(そのうち大学での集中講座は4週間)のプログラムに参加している。1999年には、学生11名、大森病院看護師2名、教員2名に、卒業生2名が加わり、合計17名が参加した。開始は7月20日と、1回目や2回目と同じ時期だが、大学での集中英語講座は4週間のみで8月20日に先に帰国した組と、5週間の授業を受けて8月27日に帰国した組とに分かれた。また滞在先も、この年からホームステイが加わった。1999年は、2名の学生と1名の教員がホテル・アパートメント、他は皆ホームステイとなった。このホームステイという現地の一般家庭での生活を通して異文化を体験し、英語を学ぶ方法は現在のプログラムでも継続している。

その後、医学部看護学科となったのちも、新型コロナウイルスSARのため中止された2003年を除き、2004年まで、毎年、学生と教員に、卒業生や大学付属の大森・大橋・佐倉病院の看護師を加

えて実施している。滞在先にはホテルステイ、留学生用のレジテンスステイという選択肢も提示しつつも、基本的にはホームステイの方式で実施していた。期間は、7月下旬に出発し、8月20日前後に帰国する4週間コースと、8月末に帰国する5週間コースの2種類が設定されていた。

2005年以降、4週間のみとなり、参加者名簿から病院看護師や卒業生の名前は消え、学生はそれまでの2、3年生に、1年生が加わった。2006年と2007年は、ナイアガラ観光を研修半ばの週末に移行し、英語集中講座が開始する直前の土曜日に成田を出発し、現地滞在日数を減らしている。Concordia Universityでのプログラムへの学生の参加人数は、最小が2名(2005年)、最多が15名(1997年)であり、多くの年が10名前後であった。

2. 2. University of Victoria での開催 (2008年～)

2008年より、研修の場所を、カナダ東部のモンリオールから、カナダ西部のプリティッシュ・コロンビア州の州都であるヴィクトリアに移している。英国統治下で首都であったヴィクトリアは、歴史的な建造物や庭園が多く、また気候が温暖で春から夏にかけて花々が街中をうめつくすことから「花の都」とも呼ばれ、カナダの中でも人気の観光地である。

ヴィクトリアには多くの教育機関があるが、その中心的存在である University of Victoria (以降、UVic) は、州立の大規模総合大学であり、医学部や看護学部も有する。世界各国から多くの留学生が集まっており、彼らが学部の学びや大学院での研究に必要なアカデミックな英語力を身につけるための専門機関として、附属の English Language Centre がある。この English Language Centre は1970年に設立した歴史ある機関であり、年間を通じて、Academic な英語や UVic 入学準備用の英語プログラム、英語が第二言語である学生向けやビジネスパーソン向けの集中講座などを提供している。また、夏期にのみ、英語に加えて文化についても学ぶ夏期英語集中講座 Summer Language and Culture を実施しており、本学部はこれを選択した。講座が実施される UVic のキャンパスは、ダウンタウンから5 km (バスで15分程度)の小高い丘の上に160ヘクタールの敷地を持ち、周囲を森と海に囲まれた美しいキャンパスである。教育環境の整った大学として評判も高くキャンパス内には最新の設備を誇るコンピューター・ラボや図書館の施設、ジムやプール、カフェテリアや映画館などのレクリエーション設備を備えている。本学部の学生たちは、正規の UVic の学生と同様にこれらの設備を利用できた。

初回の2008年は、7月27日日曜日に出発し、翌日の月曜日からは4週間の講座で学び、8月24日に帰国している。学生14名と教員2名が参加した。報告書の内容では、それまでのコンコーディアでの研修と比較して、観光が減り、英語学習と現地の歴史や文化を学ぶフィールドワークが増えていた。この年に本学部が提出した2009年度からのカリキュラムの科目概要には、現在も継続されるプログラムの学習の3つの特徴、専門的教育機関で「集中的に実践的な英語」の学習、「ホームステイ」による異文化体験、医療機関の見学や現地の看護師や看護学生の交流を通じた「カナダの医療や看護事情」の学習が記されている。看護を学ぶ大学生としての必要な英語力の向上、つまり ESP (English for Specific Purposes) を重視した内容の強化がみられる。

2009年以降も、同様のスケジュールで、現地の家庭に1名ずつホームステイしながら UVic 附属 English Language Centre の集中講座に通い、当学部の学生のための特別活動を通じてカナ

ダの医療について学んでいる。2009年は新型インフルエンザの世界的な流行のため中止となったが、2010年に再開した。

2008年から2014年まで、UVicの4週間のプログラムに通学する内容で、2010年10名、2011年11名、2012年14名、2013年8名、2014年9名の学生が参加している。それまでの4週間の日程では、3年生の実習スケジュールとの調整の難しさや費用の高騰化などの問題があり、2015年に、UVicで新設された3週間のプログラムに変更した。この2015年は、学生13名が参加した。2016年、2017年は、テロの多発等の不安定な国際情勢の懸念から、申込者が少なく催行できていない。2018年は9名の学生、2019年は12名の学生が受講した。

2.3. 英語科目の中での位置付けの変遷

医療短期大学時代の1985年のカリキュラムでは、英語は、必修が「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」の4単位、選択が「英語Ⅲ」の1単位であった。1997年度のカリキュラム改定時に、この選択の「英語Ⅲ」が2単位となり、この年に開始した短期海外研修である「夏期英語集中講座」を修了した学生に、この「英語Ⅲ」2単位が認定された。

2002年、医学部看護学科と大学に昇格後、2002年～2008年度のカリキュラムでは、「夏期英語集中講座」は2単位の選択科目となり、1～4年次まで履修することができるようになった。この時期は、英語の必修科目が、1、2年が各4単位、3年は春と秋学期あわせて2単位と、3年間で10単位必要であり、選択科目として「夏期英語集中講座」か4年次の「実践応用の英語」2単位のいずれかを取得する必要があるがあった。2009年度からのカリキュラムでは、英語の必修科目が3年春までの7単位と減り、選択科目が5科目に増えた。「夏期英語集中講座」は1単位の選択科目となった。

2011年、看護学部となってからも、「夏期英語集中講座」は1単位の選択科目であった。2020年現在のカリキュラムに改正されたのは、2016年である。英語の必修科目は7単位と従来と変わらず、専門科目は、他学部と合同の「実用医療英語」加わり6科目となり、卒業までに選択科目を1つ以上とることが必要である。選択科目のひとつである「夏期英語集中講座」は2016年度以降2単位となった。

3. 「夏期英語集中講座」の特徴とその効果—2019年度を例に

3.1. 概要

著者が担当した、2019年度を例に「夏期英語集中講座」の特徴とその教育効果を検討する。2020年度は新型ウイルスのパンデミックで中止となったため、これが最新の記録となる。この「夏期英語集中講座」は、2019年度時点では1年から3年までが受講可能な選択科目であり、実践的英語力の習得と、カナダの文化や医療事情についての理解を深めることを到達目標としている。これらの目標を達成するため、現地では、UVic附属機関の集中英語講座と、ホームステイ、カナダの医療事情を学ぶための本学部独自の医療講座を実施している。

2019年度は、8月2日から8月26日（日本時間）に実施し、2年生10名、1年生2名の計12名が参加した。従来と同じく、現地の家庭にホームステイをし、UVic附属のEnglish Language Centreにて実施される集中講座 Summer Language and Culture(3週間)を受講し、本学部が準備したカナダの医療を学ぶフィールドワークに参加しながら、英語とカナダの文化や医療を学んだ。出発前に、5回（1回90分）の事前研修と個人面談があり、帰国後に2回の

事後研修が行われた。事前研修では、海外渡航時のリスクマネジメントや、現地で必要な単語や会話を学んでいる。カナダは移民も多く、ホストファミリーの人種、出身地も多様である。カナダの歴史や多文化主義についての講義も受けた。また、教育効果を測るために、研修の前後に英語能力測定テストとアンケート調査を行った。

3. 2. UVic 附属機関の集中英語講座

2019年のSummer Language and Cultureは、8月6日から23日までの3週間実施された。学生は、事前に日本からオンラインで簡単な英語力チェックと学習状況のアンケートに答え、初日にプレACEMENTテストを受けて、語学習熟度別クラスに分かれる。レベル1に5名、レベル2に7名と判定された。このクラスわけは、数字が大きくなるごとに習得度が高くなり、レベル1は初級 (IELTS3-3.5程度)、レベル2が初級+ (IELTS3.5-4程度) で、レベル6 (IELTS6.5) まで設定されている。各レベルに数クラスあるため、当学部の学生をできるだけ分散したクラス配置を依頼した。毎年8月は、ヨーロッパやラテンアメリカの留学生たちが帰国する時期であることから、日本、韓国、中国などの東アジアからの学生の比率が高いという。特に、初級クラスに日本人が多く集まる傾向にあり、クラス内で母語を使わないよう教員が頻繁に注意することで英語のみの環境の確保に努めていた。

英語の授業は月曜日から金曜日まで週5日、朝8時45分から12時45分まで行われている。途中20分の休憩を挟む。指定されたテキスト American English File (Oxford University Press) の他に補足のプリントなどもあり、毎日課題が出され、翌日に提出するようになっている。Centreの報告によると、全体で60時間の授業のうち、授業ではCommunicative Competenceに20時間、Listeningに20時間、Reading & Vocabularyが10時間、Writing & Grammarが10時間の設計となっており、ReadingやWritingは自宅での課題が追加されている。午後はセンターが主催で、UVicの学生が運営する様々なプログラムが提供され、希望制で参加できた。博物館や史跡でのフィールドスタディや、ディスカッションやディベート等のワークショップなど学習的なものから、ハイキングや市内観光、バーベキューなど体験と交流を重視したものまで、毎日多様なプログラムが準備されている。学生たちは、英語で行われるこれらのプログラムに参加することで、カナダの歴史や文化、自然を体験しながら、クラスを超えて、現地の大学生や各国からの留学生と交流した。他に、夕方に学生寮にてパーティ等の交流イベントや、週末にバンクーバー観光やホエールウォッチングなどのオプション (有料) のツアーも準備されていたが、本学部生は参加していなかった。夜や週末は、授業の課題学習やホストファミリーとの交流の時間としている様子が見られた。

3. 3. ホームステイ

海外研修だからこそ可能な学習経験が、現地の家庭に滞在するホームステイである。ヴィクトリアにおいて数多くの教育機関の留学コーディネートを長年担当しているYuri Jenks氏が、各学生の属性や希望に関するアンケートをとり、ホストファミリーとマッチングを行っている。ホストファミリーには、ネイティブスピーカーであり、日本語を話さない、3週間の期間中不在にならない、学生用に1部屋と食事を提供可能、ドラッグの使用や性的な問題がない、同時期に日本人や異性の学生の受け入れがない、など細かな条件に合致した家族のみが選ばれている。中には2008年開始以来継続して本学の学生を受け入れている家族もあり、著者が家

庭訪問した際には、今までの学生の写真を見せてくれた。カナダは様々な国からの移民が多いことから、イギリス系だけではなく、フランス系やインドや中国などのアジア系、中東系など様々な家庭があった。学生たちにとって、ホストファミリーとの時間は、授業学んだ英語を実践する場でもあり、多文化主義を経験する機会となっている。

学生は、各家庭からバスで UVic まで通学した。ヴィクトリアはカナダの中でも治安がよく、公共のバスが発達しているため、大学だけではなく、ダウンタウンや各観光地までバスで移動することができる。夜の一人歩きが可能な都市ではあったが、研修中は 20 時以降の外出はホストファミリーと一緒に時のみとした。カナダでは、大学生は親元を離れるのが一般的であるため、ホストファミリーは学生たちを大人として扱い、ランチボックスの準備や洗濯などは学生自身に任せる家庭が多かった。自宅生が多い本学の学生たちにとって、自立するきっかけにもなったようだ。

3. 4. 本学部による医療講座

カナダの医療事情を学ぶために、本学部独自の医療講座を組み込んでいる。Yuri Jenks 氏の協力を得、UVic の午後のプログラムのスケジュールと調整しながら、2019 年度は、3 つの医療講座を実施した。講座に先立ち、一般的なカナダ医療の仕組みや看護資格についてといった基礎知識は、事前に日本語で学習をした。

最初の講座は、高齢者福祉施設で実施した。この施設に勤務するカナダ人の看護師の案内により、そこに入居する高齢者たちの生活の様子や、施設の設備などを見学した。看護師たちが高齢者のケアをする時に使用するベッドや車椅子を、また看護師の負担を軽減するための器具や工夫などを体験した。すでに日本で実習経験のある 2 年生たちは、日本と比較をしながら様々な質問をしていた。この日の報告書に「高齢者ケアで重視する点が日本とカナダで違うことを学んだ。日本のケア精神は大事だが、カナダよりも看護師の仕事の範囲が多すぎるのではないかと感じた」と書いた学生もいた。次の講座は、現地の総合病院の見学とそこで働くカナダ人の看護師の話を書くプログラムである。2019 年に見学した病院は、歴史があるヴィクトリアの中心的な病院であり、1933 年、国際会議に出席の帰路で倒れた新渡戸稲造の終焉の場でもある。数年前に病棟の建て替えがあり、新渡戸が緊急手術を受けた手術室の横に、新渡戸ガーデンと名付けられた中庭ができ、隣接する礼拝堂には新渡戸の肖像が飾ってあった。学生たちは、カナダにおける医療事情や、臨床で働く看護師の経験などを学修した。また、5,000 円紙幣の肖像画にある新渡戸が、現在から 100 年ほど前に国際平和のために尽力したことを初めて知った学生も少なからずおり、「日本人として国際的な視野を持つことの重要性も感じた」と報告書に記した者もいた。上記の 2 講座は、現地の看護師による英語での説明だった。英語力の向上のため、英語のみでの実施が望ましいが、英語力のレベルが達していない学生もいたため、コーディネーターか筆者が要点のみ通訳した。学生たちは、医療や看護の専門用語は比較的理解しており、大学の通常授業の効果を実感できる場にもなった。

上記の 2 講座は例年、類似の内容を実施しているが、2019 年は、本学部のディプロマポリシーのひとつ「国際的視野に立ち、社会に貢献しようとする姿勢を身につけている」を重視した講座を追加した。現在ヴィクトリアの病院に勤務する日本人 Nurse Practitioner のライフヒストリーを聞く講座である。この方は、現在 40 代であり、日本の看護大学を卒業後、日本で看護師として勤務した後、カナダにまず語学留学をして、その後カナダの大学院で NP (Nurse

Practitioner)の資格をとった。自身の現在にいたるまでのこの20数年の経験や、カナダでのNPとしての働き方などを話してくれた上で、国際的に働くには、現在の大学での看護専門科目と英語の学習が重要であると強調した。学生たちからの質問が相次ぎ、予定時間を大幅に超過し2時間強の講義となった。この日の報告書は、「海外で働く看護師になりたい」「国際的に活躍できるよう、今から英語をもっと勉強したい」など学生たちのモチベーションが強まったことを示すコメントが並んだ。また個別面談でも、このことがきっかけで帰国後の学習態度が大きく変わったと語る学生も複数いた。

本学部が独自に実施している医療講座では、カナダの医療事情や看護師としての働き方を学び、国際的な医療に対する知識を広げると同時に、学生たちが属する日本の医療や看護師のあり方を考えるきっかけを提供している。現地施設の見学は現地の看護師による案内のため、学習している英語力を試す場としての側面を持つ。さらに、2019年度に追加した講座は、ディプロマシーポリシーの実現のための学習の意欲を向上させる効果があると同時にキャリア教育としての効果も得られた。

3.5. 講座の特徴と教育効果

以上のように、本学部の「夏期英語集中講座」には、主に3つの活動があり、これが有機的に機能することで、より「実践的な英語力を身につけ」と国際的な視野を持つきっかけとして「カナダの医療事情の理解」という学習目標を実現しようとしている。具体的には、UVicで「集中的な英語講座」を受講することで英語力の習得を目指し、「ホームステイ」によって異文化を体験すると共に、学んだ英語の実践練習を行い、「医療講座」によってカナダの医療事情や看護師のあり方を学び、看護学生として視野を広げ、専門知識を増やし、専門職としてのキャリアを考える。その上で、語学力が重要であることを知り、また英語の学習へのモチベーションが高まるという好循環が、筆者の観察、また学生からの報告書や面談結果から示された。このような質的な教育効果を確認した上で、次に語学面での効果について検証したい。

4. 「夏期英語集中講座」による語学面の効果—2019年度を例に

4.1. 語学力の向上度の測定方法

授業や研修による語学力の向上度を測る方法には、主観的な評価と客観的な評価がある。主観的な評価は、研修前後に参加学生にアンケート調査を行い、自身の語学力がどのくらい向上したか学生自身の認識を問うものである。客観的な評価には、授業や研修実施前後に語学力判定テストを行いその差を比較する方法と、授業や研修に受講した学生と受講しなかった学生を比較する方法などがある。短期語学留学プログラムの教育効果として、語学力の向上を測る先行研究は多くあり、主観的な評価をもとにした研究からは、3週間未満という短期の留学でも、リスニング力を中心に語学力向上に対する自己評価が高い傾向があることが報告されている。授業に加えて、現地での生活における授業外の時間でのインプット量が多いことが理由のひとつに挙げられている(古谷, 2005; 松田, 2007; 工藤, 2011)。また短期語学留学経験が、参加者のその後の学習意欲の向上に寄与したと報告する研究も多い(工藤, 2011; Sabet, 2007; 田浦, et al., 2009)。また、鈴木・林(2014)は、英国の協定大学における約3週間の短期語学研修に参加した学生たちに、情緒面での肯定的変化、特に「自ら進んで自己開示・意思表示をしたり、情報獲得を試みたり、会話を展開させようとする」といったコミュニケー

ションに対する「積極性」を高めたと報告している。

客観的な評価としてよく用いられるのが、研修の前後で同じ英語力検定テストを受験させ、その差を見る方法である。先行研究では、実用英語検定、TOEIC、TOEFL、CASECなどが使用されている。本稿の「夏期英語集中講座」では、学生の英語能力測定するテストとして、数年前から株式会社教育測定研究所のCASEC (Computerized Assessment System for English Communication) を用いている。CASECは、日常生活、学校生活、ビジネスの場での英語でのコミュニケーション能力を4つの分野(語いの知識、表現の知識、リスニングにおける大意把握、具体情報の聞き取り能力)から測るコンピューターテストである。CASECを調査手段として用いた先行研究では、留学先で様々な国や地域の人々とやりとりするために必要な英語のコミュニケーション能力を、どの程度身に付けているか測ることを目的に採用している(例:久野, 2011; 牟田, 2009)。CASECを用いて、短期語学留学の効果を測定した結果、CASECの平均点がやや伸びることを報告した先行研究もある(吉田 & 小寺, 2009; 久野, 2011)。

鈴木と林が、成蹊大学の3週間の英国短期留学の学生たちを対象にした調査では、留学前、留学直後と比較したところ、言語面で英語能力試験(CASEC)のスコアに有意傾向がみられ、特にリスニング力(大意把握)において統計的に有意な伸びが認められた。さらに、留学終了1年後にも同じCASECを使用して分析したところ、留学後に伸びが見られた英語能力が、留学終了1年後もある程度持続されていたと報告している(鈴木 & 林, 2014; 林 & 鈴木, 2017)。

4. 2. 語学力の向上についての主観的な評価

本学部の「夏期英語集中講座」について、主観的な評価として、学生たちが回答した帰国直後のアンケートと、帰国1年後の報告を分析した。まず、語学面に関する効果が認められた。帰国後に、各人が自習的に受験した英語の検定試験の結果より、英検に合格した学生が2名、TOEICでのスコアが上がった学生が3名いた。帰国後の2019年度第2回の英検(1次10月、2次11月に実施)で、2級に合格した学生からは、「以前受験した時は、リスニングが圧倒的に足りなくて落ちていましたが、カナダの後、リスニングでしっかり点数がとれて余裕をもって合格しました」との報告があった。具体的な結果はないものの、英語への学習意欲が増したという学生も少なくない。

加えて、複数の学生から、英語に対する苦手意識が減り、海外旅行や日常生活において積極的にコミュニケーションができるようになったという変化が報告されている。「留学前は、英語を話すことへの緊張感から、コミュニケーションをとることは少なかったが、カナダの後に海外旅行へ行った際に、英語で会話をするのが楽しく感じた」、「海外旅行に行った際に日常会話程度であれば聞き取ることができ、また抵抗感なく、英語を話すことができるようになった」などが記述されていた。また、ホストファミリーやUVicのクラスメイトなどとメールやチャットを続けるなど、短期留学で得た人間関係を通じて、英語でのコミュニケーションを継続的に実践していることも報告された。

以上のように、学生自身が、カナダでの短期留学が自身の英語力に与えている影響を、肯定的に評価していることが確認できた。

4.3. 英語能力試験 (CASEC) による効果測定

4.3.1. CASEC の概要とその実施手順

客観的に語学力の向上を測定するために、CASEC のテストスコアを分析した。CASEC は、項目応答理論に基づいた CAT (コンピューター適応型テスト) であり、40～50分と他の英語検定よりも短時間で終了でき、測定スケール (英検 5 級～1 級) の幅が広いことが、本学部の学生に適しているため、夏期英語集中講座の効果測定テストとして利用している。テストは、4 分野 (語いの知識、表現の知識、リスニングにおける大意把握、具体情報の聞き取り能力) を 4 つのセクションに分けて出題しており、配点は各 250 点 (合計 1,000 点満点) となっている。学生個人が受領する公式スコアレポートには、各セクションの点数と CASEC 合計点数、合計点数から分けられた Proficiency Scale (習熟度) のレベルが示される。さらに、CASEC 合計点を元に算出された TOEIC スコア目安と英検 (実用英語技能検定) 級目安も提示されるため、以前に受験したテストの英語力と現在の英語力の比較も可能である。Proficiency Scale のレベルは、A レベル (760～870 点) と AA レベル (880～1,000 点) が、いずれも「日常生活や広く社会生活で交わされるコミュニケーションが可能」で英検目安級は AA レベルが準 1 級、A レベルが 2 級から準 1 級である。同様に、B レベル (600～759 点) は「日常生活や社会生活で交わされる基礎的な内容についてのコミュニケーションが可能」で英検目安級が準 2 級から 2 級、C レベル (450～599 点) は「日常生活で交わされるごく一般的な内容についてのコミュニケーションが可能」で英検目安級が 3 級から準 2 級、D レベル (390～444 点) が「日常生活で交わされる基礎的な内容についてのコミュニケーションが可能」で英検目安級は 3 級、E レベル (389 点以下) は「挨拶や紹介などごく初歩的な応答が可能」で英検目安級は 4 級から 3 級である。

問題形式は、「語いの知識」および「表現の知識」は、空所補助形式で、4 肢択一で回答する。リスニング問題である「リスニングにおける大意把握力」と「具体情報の聞き取り能力」は同様の回答形式だが、「具体情報の聞き取り能力」についてのみタイピングによるディクテーション (書き取り) が含まれる。

調査は、留学前 (集中講座開始直後、カナダ出発の約 7 週間前) と留学後 (帰国後約 4 週間) の 2 回、共通の手順で、大学の OA ルームにて CASEC 運営会社の担当者と教員の 2 名の試験監督の下、実施した。実施日程が、留学時からやや離れているのは、その間に学生の看護実習と定期試験があったためである。

夏期英語集中講座の受講者 12 名全員が、同じ条件で留学前と留学後の 2 回のテストを受験した。

4.3.2. 結果

総合点

留学前のテスト結果では、12 名の平均点は 476.33 点 (最高 600 点、最低 328 点、標準偏差 78.58) だった (表 1)。前述の CASEC 習熟度のレベルで上位である A や AA レベルの学生はいなかった。12 名中、最高が B レベルで 1 名、C レベル 6 名、D レベル 4 名、E レベル 1 名である (表 2)。学生向けの留学前アンケートにおいて、この講座への参加を決めた理由として「英語があまり得意でないため、ひとりで海外は不安だが、教員が引率するため安心」「これを機会に英語の苦手意識を克服したい」等が記述されていたことから、やや英語力が低めな

学生が含まれていることを想定していたが、それがあらわれた結果だった。

表1が示すように、留学後のテストでは平均点535.92点（最高613点，最低438点，標準偏差57.77）となり，留学後のテストでは留学前と比較して平均59.58点上昇した。留学後のテストスコアが，留学前より上昇した学生が12名中11名（最大143点，最小3点），下落したのは1名（-41点）のみだった。Proficiency Levelは，Bレベルが2名に増え，Dレベルが1名のみ，残り9名はCレベルであり，Proficiency Levelにおいても向上がみられた。

表1 CASEC スコアの推移 (n=12)

学生 (ID)	総合点		点数差 (留学後-留学前)
	留学前	留学後	
1	600	603	3
2	570	613	43
3	531	490	-41
4	523	581	58
5	510	600	90
6	508	542	34
7	475	552	77
8	437	473	36
9	425	473	48
10	409	523	114
11	400	543	143
12	328	438	110
平均	476.33	535.92	59.58
標準偏差	78.58	57.77	

表2 CASEC Proficiency Level (習熟度) 毎の人数 (n=12)

LEVEL	スコア範囲	留学前テスト (人)	留学後テスト (人)
A, AA	760~1,000	0	0
B	600~759	1	2
C	450~599	6	9
D	390~449	4	1
E	0~389	1	0

留学前・留学後テストの平均点を， t 検定（対応あり・両側検定）と効果量 d より検証した結果， $t = -4.05$ ， $p = 0.002 < 0.01$ ，で有意な差があり， $d = 1.17$ と効果も大きいこともわかった（表3）。すなわち，夏期英語集中講座の参加後に，学生たちの英語力が伸びたと言える。

表 3 総合スコア平均値の差（留学前・留学後, n = 12）

	スコア差 平均値	標準 偏差	差の 95%信頼区間		t 値	p (両側)	効果量 d (Cohen)
			下限	上限			
総合スコア (留学前-留学後)	-59.58	51.02	-92.00	-27.17	-4.05	0.002 **	1.17

* p < 0.05, ** p < 0.01

セクション別

次に、スコアの変化をセクション別に分析する。表 4 が示すように、各セクションの平均点は、セクション 1「語いの知識」で+7.66 点（留学前 124.42 点、留学後 132.08 点）、セクション 2「表現の知識」で+16.08 点（留学前 106.25 点、留学後 122.33 点）、セクション 3「リスニングにおける大意把握」で+25.5 点（留学前 129.75 点、留学後 155.25 点）、セクション 4「具体情報の聞き取り能力」で+10.33 点（留学前 115.92、留学後 126.25 点）と、すべてのセクションでスコアの上昇が認められた。

表 4 セクションごとのスコア推移（n=12）

	スコア			標準偏差
	平均値	最小値	最高値	
セクション 1				
留学前	124.42	85	175	26.13
留学後	132.08	58	146	19.61
セクション 2				
留学前	106.25	58	146	26.41
留学後	122.33	92	159	25.04
セクション 3				
留学前	129.75	78	185	30.58
留学後	155.25	120	206	27.47
セクション 4				
留学前	115.92	78	141	20.15
留学後	126.25	106	142	13.07

セクション別の留学前・留学後の平均点を、*t* 検定（対応あり・両側検定）と効果量 *d* より検証した結果を表 5 に示した。セクション 2「表現の知識」が $p=0.041 < 0.05$ 、セクション 3「リスニングでの大意把握」が $p=0.032 < 0.05$ と、統計的に有意差が認められた。一方で、セクション 1「語いの知識」では $p=0.17$ 、セクション 4「具体情報の聞き取り能力」では $p=0.058$

と、有意差が認められなかった。

株式会社教育測定研究所「CASEC: Computerized Assessment System for English Communication」パンフレットによると、セクション2「表現の知識」は、「日常生活・学校生活やビジネスの場などに密着したシチュエーションの会話の中で、実際によく使われる表現の知識及びその用法」について空所補助形式で、4肢択一で解答する問題である。セクション3は、リスニングと形式は異なるが、セクション2と同様のシチュエーションにおける「会話やニュースや機内放送などを聞き、その内容大意を理解」しているかを4肢択一で解答する問題である。以上から、学生の英語力、特に日常・学校生活での会話でよく使われる表現の知識と、リスニングによる大意把握力が、有意に向上したと言える。

表5 セクション別の対応サンプルの差 (留学前・留学後, n = 12)

セクション	スコア差 平均値	標準偏差	差の95%信頼区間		t 値	p (両側)	効果量 d (Cohen)
			下限	上限			
セクション1 (留学前-留学後)	-7.67	18.10	-19.17	3.84	-1.47	0.170	0.42
セクション2 (留学前-留学後)	-16.08	24.12	-31.41	-0.76	-2.31	0.041*	0.64
セクション3 (留学前-留学後)	-25.50	35.97	-48.35	-2.65	-2.46	0.032*	0.71
セクション4 (留学前-留学後)	-10.33	16.90	-21.07	0.40	-2.12	0.058	0.61

* p < 0.05

これらの背景として、まず、UVic のプログラムの特徴があげられよう。UVic のプログラムは、60 時間中 20 時間 Communicative Competence, 20 時間 Listening を学習するデザインになっている。さらに 2019 年度の受講学生たちが所属した Level 1 (初級) と Level 2 (初級+) のテキストや授業内容が、学校生活や日常生活での実践的なコミュニケーションを重視していたことが影響したかもしれない。午後のプログラムも、アカデミックな学習よりはフィールドワークなど共に体験するものが多く、その活動において英語でコミュニケーションをとる練習を重ねていたようだ。これに加えて、ホームステイの影響があげられる。学生たちの日々の報告や事後アンケートにおいて、ホームステイ先の家族とコミュニケーションをとるために、授業で習った表現を活用したり、意図をなんとか伝えようと英単語を調べたり表現の仕方を工夫したことなどが報告されている。また、授業外で英語をよく使用した機会として、ホームステイ先から大学へ通学する交通機関の利用時、街での買い物や観光時などもあげられていた。授業内外を通して十分にスピーキングとリスニングの実践の場が与えられていたと言えよう。一方で、「日本で勉強していた時のように、文法などが正しいかを気にして話さない、のではなく、なんとか相手とコミュニケーションをとるために、知っている単語をつなぎあわせるだけでもよから必死で話そうとした」という学生のコメントに象徴されるように、文法の学習については優先順位が低かったようだ。また、大学の通常時の授業で実施しているような、文献講読をほとんどしていなかったことも報告されている。それらが、セクション1の語いの知識やセクション4のディクテーションの向上について、統計的な有意差が認められなかったことと関連しているかもしれない。つまり、短期留学期間中の英語の運用は、学校・日常生活におけるスピーキング・リスニングが中心であり、それらの経験の結果、会話における知識を増

し、相手の言いたいことを把握する力が鍛えられ、全体的な英語力の伸びにつながったと推測可能である。

以上、CASECの留学前・留学後テストスコアから、英語力全体の伸びと、その中でも日常会話の「語いの知識」と「リスニングでの大意把握力」の伸びに統計的有意差が見られ、海外短期留学の語学力における効果が示された。

5. 考 察

本稿では、看護学部における短期語学留学プログラム「夏期英語集中講座」の1997年からの取り組み内容を確認し、2019年度の実施内容を例にその教育効果を検討してきた。開始当時は、5週間という現在より長い日程で、観光や現地視察を数多く含んでおり、短期大学時の他の海外研修と同様に「国際的な視野」を持つことに重点が置かれていた。参加者には、附属病院の看護師や卒業生も含み、看護領域の教員自身も学生と共に英語の集中授業を受講するなど、東邦大学の看護全体の国際化、語学力の向上を目指していたことが推察される。しかし、短期大学から大学となり、単位や科目名の変化があり、より学部の「授業」としての側面を強化する内容へと変化してきた。「国際的な視野」を持ち、一般的な英語力を向上するだけではなく、看護学生としての医療・看護領域での専門的な学びとの両立が目指されるようになり、現在のプログラムへと発展したことが確認できた。

また、2019年度を例に、現在のプログラムの特徴とその効果を検討した。看護学部の「夏期英語集中講座」には、大きく3つの特徴があり、それらが有機的に機能して学生たちを成長させていることが認められた。第一に、現地の語学教育機関で集中的に他国の学生たちと共に英語を学習し、第二にホームステイ先で現地の文化や生活を体験しながら授業で学んだ英語によるコミュニケーションを実践し、さらに本学部独自の医療講座によってカナダの医療や看護師の状況を学び、医療人としての国際的な視野を広げる。語学面でも、学生自身による「成長した」「語学力が向上した」という主観的な評価に加えて、留学前留学後のCASECテストのスコアから、英語力（特に、語いの知識と、リスニングで大意を把握する力）が向上したことが統計的に示された。また本稿では検証しきれなかったが、授業として実施し、英語教員が担当することで、短期留学プログラムに参加する学生の受講前、また受講後の英語学習について継続的にフォローができるメリットもあるだろう。以上のように、語学留学プログラム「夏期英語集中講座」が、1997年から、その時代の学部の教育方針や社会状況にあわせながら変化し、教育の質をより高めてきたその変遷を振り返りつつ、2019年度の実施例を元に、プログラムとして教育効果があることを確認した。

昨今、他大学では、教員や大学側の負担軽減のために、短期語学留学プログラムは授業としての実施をやめ、希望者向けに外部業者のプログラムを斡旋している例もある。しかし、一般的な短期語学留学では、この「夏期英語集中講座」の特徴でもある、現地で独自の医療講座の実施等も含めた、看護・医療専門職を目指す学生のためのESP (English for Specific Purpose) の実現は難しいだろう。学部として、この「夏期英語集中講座」ないしは同様の語学教育を、継続していくことが重要である。ただ、この教育を、新型ウィルスのパンデミックによって変化した新しい環境において、どのように提供するか。これが今後の課題である。

引用文献

- 古谷則子. (2005). 短期留学は効果的であるか? 文化女子大学紀要, 13, 19-30.
- 林 千賀, 鈴木理恵. (2017). 海外語学短期留学がもたらす効果の持続性—学生の言語的・情意的側面に見られる変化—. 関東甲信越英語教育学会誌, 31, 15-28.
- 工藤和弘. (2011年12月). 短期海外研修プログラムの教育的効果とは—再考と提言—. ウェブマガジン『留学交流』, 9, 1-10.
- 久野寛之. (2011). 3週間の短期海外語学研修が大学生の英語能力に及ぼす効果について. 北海道文教大学論集, 12(3), 127-145.
- 松田康子. (2007). 短期海外研修の意義とその事前研修について—学生の報告書とアンケート調査の結果から. 名古屋文理大学紀要(7), 45-50.
- 日本学生支援機構「2018(平成30)年度 日本人学生留学状況調査結果」https://www.studyinjapan.go.jp/ja/_mt/2020/08/date2018n.pdf last 最終アクセス: 2020/10/30
- OECD. (2019). Education at a Glance 2019. <https://www.oecd-ilibrary.org/sites/17d19cd9-en/index.html?itemId=/content/component/17d19cd9-en>. Retrieved November 10, 2020, from the OECD library.
- 大津理香, 佐竹正夫. (2016). 短期海外語学研修の効果—先行研究と常盤大学の事例—. 常盤国際紀要(20).
- Sabet, Mehran. (2007). Are Study Abroad Programs Effective? 聖学院大学論業, 20(2).
- 鈴木理恵, 林 千賀. (2014). 海外語学短期留学の効果—学生の言語的・情意的側面に見られる変化—. 関東甲信越英語教育学会誌(28), 83-96.
- 田浦秀幸, 堀井耕太郎, 馬西卓徳, 岡田宏子, 清水大介, 柏本恵未, 戸成辰也. (2009). ニュージーランド短期英語研修の効果に関する一考察. 言語文化学研究(言語情報編)(4), 1-22.
- 吉田三郎, 小寺光雄. (2009). 短期海外語学研修が高専学生の英語力にもたらす効果. 福井工業高等専門学校 研究紀要, 43, 111-122.

資 料

- 東邦大学医療短期大学・東邦大学医学部看護学科. Report on Intensive Summer English School at Concordia University(コンコーディア大学夏期英語集中講座研修報告)1997年～2007年.(2003年除く)
- 東邦大学医学部看護学科. Report on Intensive Summer English School. 2008年, 2010年.
- 東邦大学看護教育85周年記念誌編集委員会(2012年). 東邦大学の看護教育85年のあゆみ. 東邦大学看護学部.